

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2016年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	文学部・教授	石黒広昭 印
研究課題	言語的文化的に多様な子どもたちに対するパフォーマンス・アート・プログラムの開発	
研究期間	2016年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 498,780円 / (採択金額) 500,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究は言語的文化的多様性を持つ子どもたちの学習支援環境の整備を目指し、パフォーマンス・アートを通じた成長支援のための学習プログラムの開発にむけた基礎調査である。年度前半では国際移動児に対する手厚い支援が行われている北欧においてその支援状況と多文化教育環境の調査を行った。年度後半では、関西地域で生活する南米に縁のある日系の子どもたちの放課後学習支援教室と連携し、創作ドラマワークショップが実施され、学校型のリテラシー課題では測ることができない豊かなマルチリテラシー能力を確認した。こうした生活の中で育成されたリテラシーを子どもたちの発達支援資源としてどのように活かしていくのが今後の課題である。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ドラマワークショップ] [国際移動児] [パフォーマンス・アート]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 海外調査

調査期間前半は、「非学校型」学習活動について、文献研究による課題の整理と海外先進地域である北欧において、移民支援環境と国際移動児の教育状況について調査を行った。後半は日本国内の言語的文化的多様性を持つ子どもたちが在籍する南米系学習支援組織においてワークショップ型介入調査を行い、子どもたちの成長を促す「非学校型」学習プログラムの構成要件を探った。

(1) 日系移民の子どもたちの継承語教育環境調査

北欧、特にスウェーデンは移民の受け入れに積極的な国として知られ、母語保持教育などに手厚い支援がなされていることで有名である。こうした教育方針は、それぞれの子どもの個性を尊重し、その多様性に応じた教育支援を行うことを是とする各種教育政策を生み出している。こうした環境において、言語的文化的多様性を持つ子どもたちに対して、どんな学習支援が行われているのか、その実態を明らかにすることが目指された。現地に住んでいる5名の日系関係者にインタビュー調査を行うことができたが、ここでは紙面の都合で4名分の抜粋を紹介する。

ストックホルムでは、現地の高校 (Gymnasium) で日本語を教えるとともに、日系の子どもたちに市の助成による継承語としての日本語の補習を行っている教員 A 氏にインタビューを行った。A 氏はストックホルム日本語補習校の教師やストックホルム大学の日本語教育専攻でも教鞭をとっていたことがあるとのことで、継承語教育としての日本語教育に対する行政支援のあり方や日本語学習動向などをうかがうことができた。OECD の報告書には、1 地区にスウェーデン語を第一言語としない子どもが 5 名以上いれば、その第一言語での個別指導が受けられるとあったが、A 氏によれば親が強く望めばその数以下であっても補習援助が受けられる可能性が高いという。実際日本語を第一言語とする子どもは多くはないが、個別指導を定期的に行っているとのことであった。また、子どもが自分の第一言語を高校で授業科目として履修することができ、その授業単位を大学進学資料として利用できるとのことである。これは現地の優位言語 (スウェーデンではスウェーデン語) が自分の第一言語ではない子どもにとってはとても有用なサポートである。日本では高校進学や大学進学において、子どもの第一言語の学習成績が考慮されることはなく、そのために言語学習中の言語を使って教科学習成績を上げる必要があり、それが受験の失敗を生み出すと指摘されている。

スウェーデン第三の都市であり、移民が多いことで有名なマルメ (Malmö) 市では、同市の母語教育課に勤務する B 氏にインタビューを行った。B 氏が研究会で報告した資料によれば、マルメ市は人口 30 万人程度で、その 30 パーセントが外国生まれ(2012 年度時点の市の報告) だという。また、市の義務教育を受けている子どもの 60 パーセントが少なくとも一人以上の外国人の親を持つという。義務教育学校で 180 人の母語教師、40 の異なる言語が 1 万人に教えられているとのことである。行政区によって支援のあり方は異なるようであるが、子どもたちの多様性と支援の厚さはストックホルム同様である。B 氏が行う日本語の補習には現在 13 名 (学年 0 (学校内プレスクール期) から 8) が参加し、金曜日の放課後、二つのグループに分かれて、週に二時間のレッスンを受けているという。全員母親が日本人で、父親は一人を除いてスウェーデン人だという。年齢、日本語能力、参加の度合い、家族や親戚のサポートなどにおいて子どものばらつきが大きく、教育課程を構造化することが難しく、多くの子どもは listening と speaking skill はよいが、reading と writing が限定的であるため、少ない時間でその能力を向上させる方法を検討しているという。

次に、マルメから電車で 30 分ほどでいくことができるデンマーク・コペンハーゲンにおいて子どもが学齢期にある三人の女性に親の立場から教育状況を話してもらった。C 氏からは成人に対する支援状況を聞くことが出来た。デンマークではデンマーク語を学ぶ移民のために三年間の無料の語学学校があるという。こうした無料制度は、出身国での学歴なども影響するようだがデンマーク政府はそのことを明示していないという。移民の言語学習者には、子どもが 7 歳までだと週 17 時間まで奨学金が 7 から 8 万であるということでデンマーク語の学習を後押ししているという。だが、語学学校は授業をまじめにやらなくても出席して最後の試験にパスすればよいので、必ずしも授業に積極的に参加するものだけでなく、ずっと語学学校に在籍し続ける人も 1 割程度いるという。大学院に行くときに外国人枠は 1 割しかないが、現地の高校に入り直せば、一般枠の 9 割の方に入り、入学しやすくなるという。コペンハーゲンの日本語補習校にお子さんを通わせている D 氏によれば、補習校の組織は講師会、保護者会、運営委員会からなるという。実際には保護者がそれぞれの役割を担うことが多く、講師と運営委員を探すのは楽ではないようだ。補習校に入学することができるだけの日本語能力を持たない子どもたちが入学を希望することが多くなり、そのための支援が近年課題となっているという。また、学齢期になっても必ずしも日本語を教科学習のための言語として使えるだけの学力がない子どもも多く、教科補習のための日本語ではなく、継承語としての日本語の学習を求める声もあるとのことである。

研究成果の概要 (つづき)

しかし、日本政府からの補助金はあくまでも帰国を前提とした子どもの補習校に対して支払われるものなので、継承語として日本語を学ぶ支援組織は対象外となる。この点はこれまで私が北米調査で、現地補習校や日本語学校で聞いた話と同じであり、「補習のための日本語」と「継承語としての日本語」の関係が海外における日本語学習支援の共通した課題であることが確認された。

(2) その他、海外調査と学会報告

スウェーデン、デンマークの複数の博物館において文化多様性を包摂してきた歴史や課題を確認することができた。特に、ドイツの次に難民(Asylum seeker)が多いスウェーデンでは、難民問題や民族紛争を扱った展示が多く見られた。ストックホルム郊外にある多文化センターでは主任研究員からスウェーデンにおける移民の状況について話をきくことができた。調査以外に、アイルランドで開催されたヨーロッパ教育学会(ECER)や滞在した Jonkoping University では、私が行ったドラマワークショップの分析結果を報告し、有意義な議論ができた。

(3) 実践介入型調査：ドラマワークショップの実施

年度後半には、日本国内で南米系の子どもたちの学習支援活動を行っている神戸にある組織(CBK)と連携し、ワークショップ型の実践介入調査を行った。神戸は前年度に続き、二回目の実施ということもあり、支援者だけでなく、子どもたちも前年度よりも慣れた様子で参加してくれた。このワークショップについては成果還元のため、ワークショップ過程のドキュメンタリーDVDを作成し、NPO 団体と参加してくれた指導者、子どもたちに配布した。現在詳細を分析中であり、学会等での報告準備をしているところである。

内閣府によれば 1988 年以降、ブラジル、ペルーなどから就労のため来日する人が増えた。1990 年には入国管理法が改正され、これら日系人は long-term resident として活動内容に制限なく就労することができるようになった。しかし、2008 年度以降の経済危機以降は離職が増え、再就職も困難となった。そのためポルトガル語をもちいるブラジル人学校に子どもを通わせることができなくなった家庭も多く、不就学児が増えるという問題が生じたという。その後、就労のための来日は減ったが、現在は permanent resident として生活する日系人が増え、子どもの教育を含め、その人たちをどのように社会的に包摂するのが大きな社会的課題になっているという。現在日本における子どもに対する支援としては公立学校における日本語教育の支援、NPO による放課後の学習支援がその中心となっている。本プロジェクトではこれらの子どもたちに対して学校枠組による教科指導ではなく、パフォーマンス・アートを通して自尊心や自信を育てるプログラム開発のための基礎調査を行うことを目指した。学校での成績不振は通常子どもたちの自尊心や自己評価を下げ、新しいことに挑戦する意欲さえも減退させることが多い。言語学習者の子どもたちは主流言語での教科学習が苦手なため学業不振になりやすいが、学校課題でないものに対しては豊かな発想との高い能力を示す可能性がある。

今回のワークショップでは子どもたちに「旅」をテーマに物語を作り、それを演じることを求めた。書くことと演じることを同時に要求したのは、子どもたちの非学校的なリテラシー能力を把握するためである。旅は誰がどこに何をしにいくのかという物語の筋を構成する上で必要とされる要素(Itallie, 1997)を意識させるテーマ設定であり、物語創作を促すのに適している。また、旅は現実的制約から自由になるファンタジーへ誘う可能性がある。ファンタジーとして創作することになれば、現実に縛られることなく、参加者の思い(理想状況設定や現実に対する不全感)が表明されることにもなろう。ファンタジーをまったくの嘘事と捉える考え方もあるが、想像は無からの構成ではなく、過去経験の生産的再構成(Vygotsky, 1932; Rodarri, 1996)であり、自己経験に対する評価を含んだ理解を示すものである。この点で、ドラマ作りは身体パフォーマンスに言語など多様な媒体を持ち込むマルチモダールな投影法として位置づけることができる。さらに、他者と協働してドラマを作る物語の協働構成は単に楽しいだけでなく、自分の期待と他者の期待のズレを体験する社会的交渉の場も提供し、それ自体が社会スキルの向上を後押しする可能性があることが示された。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文

石黒広昭 (2017. 2) 「パフォーマンス・アートによる言語文化的に多様な子どもたちのアイデンティティ変容」
立教大学教育学年報, 60. 3-23.

②図書

M. バンクス/石黒広昭 (監訳) (2016. 10) 「SAGE質的研究キット」シリーズ5 『質的研究におけるビジュアルデータの使用』 新曜社, 224.

石黒広昭 (2016. 4) 第3章 「発達の社会・文化的基礎」 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) 『新・発達心理学ハンドブック』 福村出版, 46-60.

③シンポジウム・公開講演会等の開催

石黒広昭 「言語学習の公共性と私性」 招待講演, 早稲田大学大学院日本語教育研究科設立15周年記念講演会シリーズ「公共日本語教育学」第3回講演, 2016年9月18日(日) 10時-11時半 早稲田大学大学院日本語教育研究科

Hiroaki Ishiguro, Invited Talk in research seminar, Dramatization with scriptwriting to hear and advocate children's voices: Collective Reflection of Classroom Learning Through Improvisational Drama Play for Linguistically /Culturally Diverse Children, September 7, at 13-15, 2016, room Ha 208, Jönköping University, Sweden.

④その他(学会報告とDVD作成)

Ishiguro, H. "Kamishibai" (Theatrical performance by picture cards) as mediating artifacts for imaginative literacy learning, European Early Childhood Education Research Association (EECERA), 26th Conference, Dublin City University, Dublin, Ireland 31st August - 3rd September, 2016.

Ishiguro, H. Collective Reflection of Classroom Learning Through Improvisational Drama Play for Linguistically /Culturally Diverse Children, in European Educational Research Association(ECER), University College Dublin, Ireland, 22-26, August, 2016

Ishiguro, H. 特別編集オリジナルDVD 実践記録「Drama Workshop at CBK」 立教大学石黒研究室 (非公開作品), 2017. 3